釣れ釣れなるままに

２００６年思い出の釣行記 PART.　９

人の情けの恩賞

鹿島釣狂

釣遊会第７回大会

☆開 催 日	平成１８年１１月２６日			
☆開催場所	春立～浜荻伏			
☆入釣場所	春立４区			
☆潮	干潮	００：１３	１５㎝	
	満潮	０８：２０	１１７㎝	
	干潮	１１：４７	１０６㎝	
☆釣　果	アブラコ	５０４	㎜	１
	カジカ	４０７	㎜	４
	重　量	６１８	０ｇ	
☆成　績	合計点数	１５２９	点	
	成績	４	位	
	持ち点	２	点	
	累計点	９	点（７欠①②③①②）	

熱き血潮の！

職場関係の親睦ミニバレーボール大会があり、チームの足を引っ張るわけにはいかないと、応援という名目で参加した。しかし、若い者にとって、老体はうろうろするばかりで邪魔になるが、応援と言いながらも出て来た以上は出さないわけにはいかないのだろう。お慰みで出させてもらったが、一旦プレーし出すとそこには夢中になってしまう熱き自分がいることに気付く。

結局、若い者に混じって５セットもプレーした。プレー中も釣り大会に間に合うだろうかと気が気ではない。しかし、何とか、自分のミスを補ってくれる若者がいて、我が職場の３チーム全てが各ブロックでの優勝を果たした。直来があるがそれは次の「釣り」という熱き戦いを控えているので遠慮する。祝勝会はそのドンチャン騒ぎにこそ意義を感じている後輩に任して、そそくさと退散した。

私が「釣」を熱く語っていると、職場の人間が、怪訝な顔をする。この雪の降る寒い中を暴風に吹き曝（さら）されながら、高波を前にしても一晩中立ちっぱなしで、一睡もすることなく釣りをしていることなど尋常なことではないと訴える。そして、その話には「しかもそんなお年で・・・」という枕詞（まくらことば）が必ず添えられる。興味のない人間にとっては狂気の沙汰としか映らないようだ。しかし、趣味の領域となると、「狂」が付くほどの人間がたくさんおり、私もその部類に入ってきたのを感ぜざるを得ない。

帰宅後、準備を整えてあった荷物を車に積み込むと、女房が

「『狂』が付くあなたにとって、一番大事な手紙が届いていますよ。」という。大会成績表の入った釣遊会からのものである。慌てて、６回大会の内、年間に関係のある４回の成績

表に目を通す。
嵐　光博：(①②５①②３)
鹿島釣狂：(７欠①②③①)
とあり、４回の成績では６点の嵐氏に１点差で追尾しており、今回優勝すれば逆転年間優勝の可能性があるのだ。その可能性とは、私が１位で嵐氏が３位以下の場合のみという大変厳しいものである。しかし、その望みが全く絶たれたものでないことが解ると、またまた、「狂」の熱き血潮が疼(うず)いてくるのである。

二度あることは三度

今回、入釣場所は春立と決めている。第５回大会で海藻の育ち具合も確認している。潮回りも大変よい。春立に着いた時は最干潮時を迎える時間帯で４区の盤にはどこでも乗れる状態になっている。先週の大会結果から、カジカが岸よりしてきている状況も伝わってきている。特に春立の隣にあるウセナイ浜やアサリ浜の成績がよいので、同じような海況の春立にもカジカが入ってきていることが予想される。嫁のアブラコは薄いと思われるが、春立は本アブラコ場なので、保険にイワムシを用意した。交番裏での大物カンカイもあるぞとイソメも準備した。今まで悲惨な結果もあったが、２度の年間優勝は同じ春立での第７回大会優勝が決定打となった。「２度あることは３度ある」を信じて、春立海岸としたのだ。

今回は、５名のお客さんに乗っていただいた。バスの中で、「北海道名人会」の佐々木忠良氏や「北の釣り会」の佐々木秀美氏、「交綸会」の岩本満氏から貴重なアドバイスをもらう。春立４区の様子を西川氏から再度、図に描いて紹介してもらった。ある程度の知識はあるものの万が一の場合の逃げ場を確認する。

２２時３０分に大会始点である春立漁港に着いた。そこで嵐氏が降り、元静内方向に引き返した。身支度を終えて２３時には、春立交番前にあるカーブの手前にさしかかり、佐々木秀美と一緒に降りる。佐々木氏は交番下に向かったが、私は４区方向に戻った。

周辺には誰もいない。最干潮の０時１３分（１５㎝）を迎えて、辺り一面の岩盤が干上がっている。このような機会は滅多にないので、舟揚場に荷物を置いてしばらく散策する。右方向で舟揚場に迫っている溝を発見する。明け方には、ここでアブラコを狙ってみよう。背後の家並みを記憶しておく。

そうこうしているうちに、狙いの最有力候補である左角に釣り人が入った。行ってみると佐々木氏である。交番前と言っていたので余裕を持っていたが、彼が狙いとしていた場所には先行者がおり、私が居るはずの場所が空いていたので、先に入ったということだ。そして、お前が来たので譲るぞとまで言う。そんな不遜なことはできないので、４区方向に戻ると、その先に、釣り人２名が下り立った。慌てて、次の狙いとしていたプール前に釣り座を設けると、その２人は私を挟んでその左右に入った。

すぐに、カジカ３５㎝、３０㎝がきたがその後が続かない。両隣に釣り人が入っている

ので長居は無用と、佐々木氏の所へ再度様子を伺いに行く。アカハラのエサに次々とアタリがあり、カジカが釣れているようである。彼の隣へ移動することを告げて、バッカンや竿を２度に分けて運んだ。途中、遊鱗会の御仁に会ったので様子を聞くと、仲間が交番前で４７㎝のカジカを２本釣ったと知らせてくれる。

バッカンに飛び込んできた大カジカ

「天知る地知る　我知る人知る」

佐々木氏の横に入って、エサを付けようとバッカンを開けると４５㎝級のカジカが紛れ込んでいる。彼に尋ねると、

「何のことよ、俺は知らないぞ。俺は、お前の場所でいい思いをさせてもらった。それで、一応海に向かって念じてはみた。自分の十八番の釣り場を人に譲ろうとするお前の気持ちが、カジカをしてバッカンに飛び込ませたのだろう。それは人への情けの恩賞ではないのか。ひょっとして、カジカがお前のコマセの臭いに負けてしまったのかも知れないぞ。お前のコマセの匂いは妙に魅惑的だからなぁ」　佐々木氏の『**おまじない**』の心遣いに感謝し、その御利益（ごりやく）を信じて一旦預かっておくことにした。

「アタリだぞ。」佐々木氏の声に振り返ると、竿が倒れるようなアタリがあり、力強く煽るとプッと糸が切れてしまった。２時頃、カジカ３５㎝が来た。迷い込んできた『**おまじない**』を除くと３本目である。未だ嫁なし。後の溝に浸けた佐々木氏の網袋の中を覗くと４０㎝上を頭に１０本ぐらいが収まっている。そして、彼の周辺にはハタハタの残骸が散乱していた。釣り上げられたカジカが、己の寿命を悟る断末魔の叫びとともに、胃液で溶けかかったハタハタを吐き出したのだ。ハタハタの岸よりにあわせてカジカが寄ってきているのだ。

３時頃、潮がひたひたと込んできて、膝下にまで打ち寄せるようになってきたのでやむなく移動することにした。佐々木氏は春立漁港左に向かうと言っていたが、漁港方向を望むと、釣り人が５名ほど入っているのが見える。私が得意とする舟揚場は優釣会 2 名に抑えられている。

佐々木氏より教えていただいたアブラコのとれる舟揚場は、前が開けていて、ここだけ波が立っていない。そこでカジカ３５㎝が来た。続けて沖から入ってきたばかりの真っ赤な色をした４０㎝ほどのカジカが来た。上げた途端、鱗が溶けた真っ白なハタハタ（下写真）をはき出した。ハゴトコも来て、一応嫁が出来た。総点数では千点（カジ４００㎜＋ハゴ２００㎜＋４．００㎏）を少し越えたところか。

佐々木氏は、自ら、あまり釣れないとしていた私の左隣舟揚場に移動した。彼もカジカを追加したようだ。

６時、年間優勝がかかっていることもあって、嵐氏の動向が気になり電話をしてみた。【圏外】が表示されたので、一旦、高い防潮堤に昇ってから、アンテナを立てると繋がった。それと同時に私の遠投の竿にアブラコ独特のアタリが出たので、携帯をほっぽり出して竿に飛び付く。獲物は右に左にと波をかき分けて突進する。そして、房掛けしたイワムシやイソメをくわえ込んだ大アブラコを手にした。メジャーを当てると５０㎝を越えている。今度はカジカが嫁になって、一気に１４００点ぐらいは確保しただろう。（アブ５００㎜＋カジ４００㎜＋５．００㎏）

あるべきバッカンに帰る

佐々木氏の『**おまじない**』の御利益（ごりやく）で私のバッカンには大アブラコが入った。それで、『**おまじない**』の主（ぬし）である大カジカは居場所がなくなったのだろう。もう一度、海の中を泳ぎ渡って、隣の舟揚場を遡り佐々木氏のバッカンに無事収まった。ホッと胸をなぜおろす。

女性釣り師が舟揚場の後でバッカンを載せたキャスターを引いている。「どうでしたか」と声を掛けると見覚えのある顔である。「北海道のつり」でお馴染みの「美釣会」池野友美さんである。「嫁を取りに来ました」と更に先の舟揚場に入った。すぐに、今度はリュックを背負い竿袋を担いだ女性釣り師が通りかかる。池野さんの仲間かなと声を掛けると、本人である。女性釣り師とあなどるなかれ、ほんとうに素早い動きで移動をくり返していたのだ。そして、「北海道のつり」での美釣会報告には大カジカを２本ぶら下げた池野さんの写真が載っていた。

９時、近投でカジカ４０㎝が来た。老漁師がやってきて釣果を肴に話すと、最近になってようやく釣果が上向きになり、先週、あまり釣れないとされている隣の舟揚場に入った釣り人がカジカを爆釣していたということだ。

粘る佐々木秀美氏

９時２０分には片付け始めた。佐々木氏はまだ竿先を見つめて粘っている。私が舟揚場を後にした９時４５分になってもまだ竿が入っている。そして少し遅れて国道にあがってきた彼の顔がなんだか綻んでいる。バッカンを覗くと山盛りのカジカの上に、５０㎝のアブラコ２本が堂々と鎮座している。話を聞くと、９時頃にアブラコの明確なアタリがあり、引き上げようとすると変な動きをする。突っ込みがないのだ。あげくに根掛かりしてしまった。ソイやハチガラと違いアブラコは待っていれば必ず出てくることを信じて、１時間ほどを根気よく待って、ようやくこの２本を同時に手にしたというのだ。

「俺のバッカンに再び舞い戻ってきたカジカの『**おまじない**』が効いたのだろう。これ

も人への情けの恩賞である。」そして、二人でその『**おまじない**』の御利益に感謝し、ウイスキーのボトルで喉を潤し合った。

私が釣ったのも腹が凹んでいたが、この２本も細い。この時期のアブラコはオスが多く、メスが産卵したタマゴを守るためにその場を離れないというのだ。エサを余りとっていないので、細身のアブラコとなる。そう考えると、この時期にアブラコが釣れるということは、この場所にはアブラコの産卵床があるということだろう。子孫を残すために、懸命に縄張りを守っているのだ。この時期のアブラコポイントを２カ所追加した。

バスがやってきた。バスに乗り込んでみると大前氏が５３㎝のアブラコと嫁に４６㎝のカジカを捕ったということだ。他にも景気のいい話が続々と出てくる。

審査結果は

審査結果

優　　勝	佐々木秀美	１６７５点	（アブラコ511㎜+カジカ　452㎜+7120g）	春　　立
準 優 勝	大前　健治	１６４３点	（アブラコ533㎜+カジカ　460㎜+6500g）	三石港左
３　　位	岩本　　満	１５５１点	（アブラコ475㎜+カジカ　466㎜+6100g）	三石越海
４　　位	鹿島　釣狂	１５２９点	（アブラコ504㎜+カジカ　407㎜+6180g）	春　　立
５　　位	佐々木忠良	１３３１点	（アブラコ531㎜+カジカ　380㎜+4200g）	三石港左
身長優勝	大前健治	５３，３㎝	（アブラコ）	三石港左

となり、私は４位にランクされた。アブラコは５０㎝を超え、しかも重量６．１８㎏で自己最高記録の１５２９点を出したにもかかわらず、それを上回る点数を出した者が３名もいたのだ。今回、優勝以外は年間優勝が無かったとはいえ、釣り場にいるときは優勝間違いなしで年間優勝も転がり込んだと考えていた自分の浅はかさが恥ずかしい。上には上がいるものだとあらためて思い知らされる。**ああ！不甲斐ない。**

総会で表彰式があった。私の成績は全釣行６回平均で１１４２点、年間成績を決める５回平均では１２０１点であった。昨年の絶不調を考えると、よい釣りが出来たと自負している。それでもって、年間優勝は９点の嵐氏に決まった。私も同点なのだが、その場合は会の規定によって６番目の成績が加味されることとあり、一歩及ばずに年間準優勝となったのだ。**ああ！口惜しや。**

＜つれづれ＞

年間成績

年間成績（７回大会中５回上位点数）

総合　優勝	嵐　光博	９点
総合準優勝	鹿島釣狂	９点
総合　３位	吉井　博	１７点
総合　４位	堀内正博	１７点
総合　５位	大前健治	２２点

年間大物賞

アブラコの部　大前健治　５３．３㎝　１１月２６日　第７回大会　三石

カジカ　の部　相馬義博　５０．０㎝　　７月１１日　第４回大会　近浦

私の７回の成績は下記の通りある。

第１回	４／２２	須築	⑦	８５０
第２回	５／２１	欠席	50	
第３回	６／１１	東歌別	①	１０８４
第４回	７／　９	近浦	②	１２７２
第５回	９／１０	春立	③	７８０
第６回	１１／１２	幌島	①	１２５９
第７回	１１／２６	春立	②	１５２９

全釣行６回平均　　６８５４÷６＝１１４２

年間成績を決める５回平均　６００４÷５＝１２０１

ニシンに変身

審査が終わってから前野氏に「カジカくれないか」と言われたので、２本進呈すると、その替わりにビカビカのニシンを頂いた。彼が三石の磯で釣りをしていると、ハタハタ網をあげていた老漁師（８２歳）が磯舟から落ちてしまった。そこで、釣り船の出港待ちをしていた釣り人と一緒になって助けあげた。すると、その漁師は家に戻って着替えをしてから、助けてくれたお礼にと取れたてのニシンをくれた。そして、その足で、すぐにまた、漁に戻っていったというのだ。人の情けの有り難さとともに、漁師生活の厳しさが伝わってくる。小ぶりながら生きのいいピンとしたニシンで、塩焼きで美味しくいただいた。人の情けの恩賞なり。

チーズの詰め合わせに変身

岩見沢に帰ってから、床屋に寄った。女将に「カジカ食べるかい？」と聞くと、「大好きだ。」との返事があり、大きめのものを進呈する。お返しに、チーズの詰め合わせを頂く。人の情けの恩賞なり。

酒気帯び運転

優勝した佐々木秀美氏よりジョッキの差し入れがある。皆さん美味しそうにグビグビ飲んでいる。私は、この時間帯で飲んでしまうと、岩見沢に着いてからも酒酔い運転になるぞとグッと我慢する。

タクシー衝突事件

　岩見沢に着いてから皆さんに別れを告げて車をバックさせると、グンと何かを押しつけた。後ろを振り返るとタクシーである。一呼吸おき、気持ちを落ち着けてから、車を元に戻してドアを閉める。すぐに、タクシーの運転手から「こんなに目立つ黄色い車なのに気がつかなかったかい」とにこやかに言われた。タクシーは◇◇氏が呼んだもので、釣りバスのすぐ後に停まっており、運転手がタクシーから下りて◇◇氏と雑談していたのだ。ぶつかった辺りを見ると、ゴム製の黒いバンパーに触れた程度で、私のバンパーの汚れが付着してその跡が白く残っていた。タクシーの運転手がその汚れを拭き取ると跡形もなくなった。ホッと胸をなぜおろす。その後、運転手が急変して凄味のある顔になり、「あんたの態度によっては、替わりに別のタクシーを呼ぶことが出来るんだぞ」とドスのきいた声になった。替わりのタクシーを呼ぶことになると後始末が大変になりそうなので
「後からお詫びにまいります。名前を伺ってもいいですか。」と言っているところに、何事かと仲間がどやどやと集まりだした。そのお陰か、
「そんなことどうでもいい。痛いところもなく、タクシーも無事だったのだから何も言わない。後はお前次第だ」とトーンが低くなる。「申し訳ありません」と深々と頭を下げると、運転手は「今度から、気をつけれよ」と◇◇氏を乗せて去っていった。私は、タクシーが見えなくなるまで深々と頭を下げて見送った。